

「神の慈愛」第 7 章 146 ページには、「二十一の心のほこり」という言葉が登場するので、これを理解するため、参考となる資料をご紹介します。

◆おふできき

- 第三号 95 なにゝてもやまいとゆうてさらになし 心ちがいのみちがあるから
- 第三号 96 このみちハ **をしい ほしいとか八いと よくとこふまん**これがほこりや
- 第三号 97 このよふのにんけん八みな神のこや 神のゆう事しかときゝわけ
- 第三号 98 ほこりさいすきやかはろた事ならば あと八めづらしたすけするぞや

◆『天之理』（安本房造：著、安本房造：1926 年刊）

神言 - 「人間に病と云うて無けれども心違いの道があるゆへ。此（この）道は凡夫心に入つあり、ほしいおしいとかわいにくいと。**うらめしとはらだちよくとこうまん**とこれが**八つの心違い**や。此の埃つもりかさなるそれゆへに病悩みも愁（うれい）災難も何もかも身の内守護の神様の心直しのいけんりつづく埃さへ速やかあらうた事なれば病の根は切れてしもうで。」

八つの埃	守護の神様	埃が生じる理由
おしい	日様 おもたり	日様の火の性（しょう）を受けて、物が耗（へ）る、無くなる、消滅する理から、惜しむ心が生じる
ほしい	月様 くにとこたち	月様の水の性を受けて、物を殖（ふ）やそうとする心が湧く
にくい	惶根尊 かしこねへ	喜ばぬ心口に出して云うのが憎み也、惶根尊が入り込んでくださって自由用（じゅうよう）に口が利く故憎みの埃が生じる
かわい	雲読尊 くもよみ	雲読尊は飲み食いのご守護、（飲食物を）我が口に入れたいだけで人を可愛がらぬ我が口だけ可愛いという汚い心
うらみ	国狭土尊 くにさづちい	国狭土尊は萬（よろ）ず続（つな）ぎ一条、金銭縁談は続ける、続ける物が切れたら、うらむ心が生じる
はらたち	月読尊 月よみ	月読尊はたつというご守護、人を立てる心が無いから腹が立つ
よく	大食天尊 たいしょく天	大食天尊はきるというご守護、千円得れば 1 万円欲しい切りの無い心が慾、重慾強慾色慾等の思い切りの悪い心が埃
こうまん	大戸辺尊 をふとのべ	大戸辺尊は引き出し伸びる理、人より伸び出ようとする心が生じるが、伸びた結果、人を押さえ見下そうとする心が生じる

◆ 『自然の真理と身の内のおさとし』（神崎靈光：著、木下真進堂発売所：1926年刊）

「神様は靈の曇りとなる心用ひ（こころづかい）を二十一の埃を揚げてあります。それを二十一ぺんの悪しき拂ひ（はらい）のお勤めをさして、頂くのであります。」

【根の埃】

1. 貧婪（ほしい）、2. 慳吝（おいしい）、3. 邪愛（かはい）、4. 憎悪（にくい）、
5. 怨恨（うらみ）、6. 忿怒（はらだち）、7. 慾（よく）、8. 高慢（こうまん）

【枝の埃】

9. 身をしみ
10. 骨をしみ
11. ねたみ（『天之理』では猜（そねみ）となっている）
12. りんき（愒気？：『天之理』によると、男女間のねたみ、やきもち）
13. 嫉妬（『天之理』によると、妻と妾の間のねたみ）
14. かんてき（『天之理』によると、身下の者に陽（おもて）にて怒（いか）る事）
15. 我身と人の身のへだて
16. 悪口
17. 仲口（なかごと）（人が言った悪口を、相手に告げ口すること）
18. そそり自慢（「そそる」には、浮かれさわぐという意味がある）
19. 我慢（『天之理』によると、自分をよく見せたいと思ってやる行為）

なお、この本では、根の埃と枝の埃を合わせて二十一節になると主張していますが、実は2つ足りません。そこで、前述の『天之理』に書かれている「二十一節」から、重複しないものを選ぶと、次の2つを追加すればよいのではないかと思われま

20. 我が子と人の子の隔て
21. 笑い（人の失策を見たり聞いたりして、気の毒に思わず、かえっておかしがる心）

ちなみに、『天之理』に書かれている「二十一節」は以下のとおりです。

1. 非道の欲しい、2. 出惜（だしをしみ）、3. 身惜（みをしみ）、4. 骨惜（ほねをしみ）
5. 恨（うらみ）、6. 猜（そねみ）、7. 愒気（りんき）、8. 嫉妬、9. 疝癢（かんしゃく）
10. 疝敵（かんてき）、11. 我身と人との隔（へだて）、12. 我子と人の子の隔
13. 悪口（あくこう）、14. 仲言（なかごと）、15. 笑い、16. 誹謗（そしり）
17. 強慾 18. 重慾、19. 自慢、20. 我慢、21. 高慢